View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

東北大学機関リポジトリ
TOUR
Tohoku University Repository

# P. Post, R. L. Grimes, A. Nugteren, P. Pettersson and H. Zondag, 2003, Disaster Ritual: Explorations of an Emerging Ritual Repertoire, Peeters.



| | |
|---|---|
| 著者 | 福田 雄 |
| 雑誌名 | 東北宗教学 |
| 巻 | 11 |
| ページ | 109-117 |
| 発行年 | 2015-12-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00123187 |

# P. Post, R. L. Grimes, A. Nugteren, P. Pettersson and H. Zondag, 2003, *Disaster Ritual: Explorations of an Emerging Ritual Repertoire,* Peeters.

日本学術振興会特別研究員（PD）　福田　　雄

## 1．はじめに

本書は、災禍のあとに行われる追悼儀礼を主題とした初めての学術研究書である。約二年間の共同研究の成果は、2002年にオランダ語で執筆・刊行され（Post et al., 2002）、その翌年に国外の事例研究を加え全面的に改稿された英語版が出版された。この先駆的な共同研究の狙いと成果を踏まえたうえで、慰霊祭・追悼式といった現代社会における災禍の儀礼を比較考察するための視座を構築することを本稿では試みたい[1]。

## 2．本書の目的と構成

書名の通り、本書は災禍のあとに行われる儀礼を研究対象としている。典礼学、比較宗教学、宗教心理学など異なる研究領域に属する研究者が、主として質的調査によって現代オランダ社会に生じつつある儀礼のレパートリーを明らかにすることを目的としている。本書で繰り返し指摘されるように、災禍のあ

1　本書を書評対象とした評者の過去の論考（福田 2011）と本稿との関係にもふれておく必要があろう。前者が現代日本の慰霊・追悼を捉え返すために本書を検討したのに対し、本稿では現代社会一般に通底するような災禍の儀礼の諸特質を考察するための枠組みを構築するために本書を再検討するものである。そうした比較社会学的観点から、筆者は災禍のあとに行われる集合的な儀礼を、本書にならい「災禍の儀礼（disaster ritual）」と呼称しておきたい。

とに行われる儀礼は、それ自体研究対象として十分に検討されることがほとんどなかった社会現象である[2]。この点を踏まえれば、本書は新たな社会現象を考察対象とするにあたっての仮説の導出や問題の発見を目的とする探索的研究として位置付けられよう。この学際的な共同研究および探索的研究という本書の二つの性格が、後述する本書の可能性と限界に密接に関連している。

次に本書の構成を見ていきたい。まず第一章では共同研究のリーダーであるポール・ポストによって共同研究全体を貫く目的とパースペクティブが概説される。45ページに及ぶ第一章の大半が、本書の中心概念である「災禍」と「儀礼」の作業定義に費やされている。続く第二章は、主として報道資料に依拠しつつ1990年代にオランダで行われた災禍が概観される[3]。災禍の儀礼の一般的特徴を明らかにすることを目的としたこの第二章は、1960年代以降のオランダ社会にみられる儀礼のダイナミズムを「診断」する第五章と対となって、より広い「歴史的文脈」のなかに災禍の儀礼を位置づけようと試みられる。これら災禍の儀礼の一般的考察に挟まれる形で、第三章および第四章の事例研究が展開される。そして最終章の第六章では「診断とパースペクティブ」と題して、現代オランダにおける災禍の儀礼の諸傾向、および今後の研究に向けた分析観点が提示される。こうして第一章で提示されていたパースペクティブと主題群が、最終章で改めて振り返られることにより、本書の知見の総括が試みられる。

以上の構成を踏まえ、次節では本書を読み解く上で重要と思われる諸概念や諸事例に焦点を当てながら要約する。

---

2　本書のほかにはイングランドを拠点として災禍のあとの儀礼（post-disaster ritual）を精力的に調査している Anne Eyre の一連の研究（1999, 2001, 2007）があるが、それについては別稿（福田 2014）を参照されたい。そのほか自然災害にかんしては、四川大地震の集合的儀礼に注目した Xu Bin の研究（2013）があげられる。ただし Xu の関心は、中華人民共和国の歴史上初めて無名の「一般市民」の追悼を可能とさせた国家－市民関係という理論的前提にあり、犠牲者を追悼することが自明とされるオランダや日本における災禍の儀礼を分析するにあたっては、その射程が異なるといえよう。

3　第二章を担当したヌグテレンは、1990年から2001年にオランダで観察された災禍の儀礼に加え、メディアを通じて影響を与えたとされる西ヨーロッパの諸事件のあとの儀礼を考察対象に含めている。近現代のメディア環境を通じた参照関係という観点から様々な境界的儀礼を考察に含めている点が興味深いが、その参照関係を支持する論拠は十分に示されていない。

## ３． 本書の内容

本書の考察対象を規定する「災禍」と「儀礼」という二つの中心概念は、第一章で次のように定義されている。まず災禍とは⑴「深刻で大規模な破壊と人的被害」を生じさせ、⑵その経験が個人を超えた集合性によって特徴付けられるような、⑶「突然の、予期せぬ出来事」として定義されている［pp. 24-５］。これら三つの要件に加え、時間的（1990年から2001年までの11年間）・空間的（オランダ国内）限定によって、本書で取り扱う災禍が境界づけられている。

災禍という概念が比較的明確なプロセスで限定されている[4]のに対し、儀礼の作業定義には異なる戦略が採用されている。まず儀礼が「本質的に宗教的であるかどうかにかかわらず、多かれ少なかれ固定化され、認識可能で反復可能なかたちにパターン化あるいは方向づけられた象徴的行為」［p. 39］と大まかに規定されたうえで、さらに関連する諸特質を列挙することで、この作業定義を「拡張」あるいは「肉付け」するという戦略である［pp. 38-39］。ただ後述するように、災禍の儀礼という目新しい研究対象を幅広い観点から捉えさせるためであろうこの戦略が、かえって本書の学術的知見の意義をより茫漠とさせているように思われる。

いずれにせよ、こうして定義された二つの概念によって把握される現代オランダの災禍の儀礼とは、どのようなものであろうか。それは以下の共通する形式をもつという。まず災害直後より記帳所が設置され[5]、ぬいぐるみや写真、花束などが自然発生的に災禍の現場に押し寄せる。その後、遅くとも数週間以内に「沈黙の行進[6]」や追悼式などの集合的儀礼が組織され、その後モニュメント

4　とはいえ「災禍」概念にも境界的な事例があることをポストも認めている。たとえばポストは、1999年に Bovenkarspel の植物園で発生したレジオネラ菌集団感染事件をその典型例としてあげている。数週間かけて次々と犠牲者が発覚したこの出来事は、「静かな災害」と呼ばれ、モニュメントが建立されたり、事件の４ヶ月後に「思い出す集い」と称される儀礼がもたれている。これに類似する現代日本の災禍としては、水俣病をあげることができよう。いずれも「突発性」という観点から捉えることはできない、災禍の儀礼の境界例として捉えることができる。

5　しばしばインターネット上にも Digital Condolence Register と呼ばれる記帳所が開設され、メッセージが投稿されるだけでなく、「デジタルキャンドルが灯され、デジタルバラが供えられる」［p. 64］という。

6　Silent Procession あるいは Procession of Compassion と呼ばれるこの行進は、オランダ特

が建立されたり発生日ごとの記念式典が開催されていく。執筆者の一人であるヌグテレンによれば、これら「個別の儀礼の諸要素が、より固定化され明確に定義されるレパートリー、あるいはある種の台本として合体した」[p. 68] と推察されるのが、1997年前後だという[7]。

こうした一般的特徴に加え、現代オランダの災禍の儀礼を個別的に描き出す試みとして、本書ではそれぞれ異なる観点から三つの事例が検討されている。比較宗教学者のヌグテレンは、アムステルダム南東部の Bijlmer に墜落した航空機事故を事例として、災禍の儀礼の多文化性を考察している。1992年にイスラエルの輸送機が墜落した高層アパートは、スリナム・アンティル諸島・ガーナなどからの移民や不法滞在者の集住地域であった。この墜落事故をめぐる災禍の儀礼は、色彩豊かな服装やドラムを用いた葬送曲など多文化的状況が反映された、「カラフル」な服喪の様式をオランダで初めて可視化したという。そしてこれ以降、宗教や民族的背景などを反映した多様な声に場を与えようという意識が災禍の儀礼にみられるようになったと考察されている。

次に典礼学者のポストは、オランダ空軍の国立ブラスバンドを乗せたベルギー航空機の墜落事故（1997年）を事例とし、軍主催の追悼式典に組み込まれた、チャプレンらによる「儀礼―典礼」パートに焦点をあてている。そこでは、宗教色の薄いスピーチや遺族に寄り添った詩が参列者から好意的に受け止められたが、時折アドリブを交えたプロテスタントのチャプレンの「説教」は厳しい批判を受けたという。それは一方で「教会的な」儀礼が拘束的なものとして忌避され、他方ではグレゴリオ聖歌や聖地巡礼など、より一般的文脈に引きあげられた「宗教的」あるいは「世俗的」儀礼が受け入れられる現代社会のトレ

---

有の儀礼とされている。松明や花を手に、スポーツセンターなどの公共施設から出発し、災禍の現場を通過し、記念式典の会場まで歩くという一般的な形式が観察されるという。

7　先述したように災禍の儀礼の一般的傾向が明らかにされている第二章は、共同研究のリーダーであるポストが執筆した第五章と一体として理解されるべきであろう。ポストは、主として Ronald L. Grimes（1987年の *Journal of Ritual Studies* 発刊に大きな役割を果たした北米の宗教学者）および Gerald Lukken（オランダの典礼・儀礼研究者）の儀礼論に大きく依拠しながら、「儀礼の危機」から「儀礼の豊穣」へという、1960年代以降の儀礼をとりまく文脈のダイナミズムのなかに災禍の儀礼を位置付けている。

ンド［p. 238］を反映しているという。

最後に宗教心理学者のゾンタグは、災禍の儀礼がいかに苦難のコーピングに役立つかという観点から、2001年元旦未明に起きたVolendumのカフェ火災の追悼行為を考察対象としている。分析の結果、ゾンタグは災禍の儀礼が、人々を災禍と向き合わせ、社会的承認をもたらし、苦難を解釈するためのナラティブを提供するという三つの役割[8]を果たしたと結論づけている。

これらの事例研究に加え、モニュメントおよび沈黙の行進（それぞれヌグテレンとポストが担当した）といったオランダの災禍の儀礼と密接に関連する象徴的実践にかんする論考のほか、オランダ国外の災禍をめぐる論考二編[9]が本書の経験的知見を提供している。

## 4．本書の可能性と課題

冒頭で述べた通り、評者は現代日本の慰霊祭・追悼式を他の文化や社会における災禍の儀礼と比較可能な現象として捉え返す視座を得るために本書を検討してきた。こうした視点からの批判的考察は、まさに本書の意図するところではないだろうか。なぜなら災禍の儀礼がオランダのドメスティックな文脈で捉え切ることのできない現代的な社会現象であり、この探索的研究を踏まえた国内外での比較研究が展開されることこそが、本書で繰り返し強調されているからである。しかしながら刊行から十年を経てもなお、本書を起点として展開された比較研究や理論研究はほとんどみられない。あったとしても参考文献の一つとしてその存在が言及されるにとどまる現状は、著者らの期待に反して災禍の儀礼研究の展望の乏しさを示していると言わざるをえない。果たして災禍の

8　この三つの役割はそれぞれ、コンフロンテーショナルな次元、社会的次元、神話的次元として分析されている。

9　それぞれスウェーデンのエストニア号海難事故（1994年、担当：ペタソン）、アメリカ同時多発テロ（2001年、担当：グライムズ）を主題とした事例研究である。この第四章は2002年のオランダ語版には含まれておらず、2001年のアメリカ同時多発テロおよび2002年に開催されたシンポジウムを受けて、その国際的視野を拡張するために英語版にのみ追加収録されている［p. 2］。ただしこれら二つの国外の災禍が、本書の規定する災禍に該当せず、またその内容が本書と一体として論じるべき水準にないとの理由から、本稿では最小限の言及にとどめている。

儀礼とは、現代社会（とりわけ今日的状況における生と死）を理解せしめる現象として取るに足りない価値しかもちえないのだろうか。以下では本書の課題であると同時に可能性として捉えられるような、ある一点に言及することで災禍の儀礼研究の展望を提示してみたい。

それは本書の始点、そして終点でもあるパースペクティブに深く関連している。先に見たとおり、本書は第一章で提示されたパースペクティブ（儀礼の干渉・流用や文脈化、儀礼のマーケットやダイナミズムなど）に従って事例研究を「分析」し、最後に再びそのパースペクティブから知見を総括するという構成をとっている。加えて前節で触れたように、概念規定上の戦略として儀礼の諸特質[10]（儀礼の集合的次元[11]や社会的機能、聖なるものの変容など）が列挙され、その諸特質ごとに今後の課題と展望が最終章で論じられている。こうした構成をとった背景にはおそらく、いくつものパースペクティブや諸特質に幅広く言及することで、災禍の儀礼という新しい現象を、できるだけ多様な観点からアプローチ可能であることを示す意図があると思われる[12]。またあえて研究の焦点を絞りきらないことで、学際的な共同研究を成り立たせつつ、この探索的研究に続く今後の幅広い展開が期待されていると推察される。だとすればこの第一章を受けた本論では、これらのパースペクティブからの検討が過不足なく行われているのか、そしてどのような手続きによってその検討から導き出された主張が妥当なものとして提示されるのかという二点が問われよう。

---

10　ポストによれば、具体的な儀礼行為のなかによりこれらの諸特質が含まれていれば含まれているほど、その「儀礼のもつ水準（ritual calibre）」［p. 40］が高いとみなせるという。列挙された諸特質は、それ自体一つ一つが興味深いものではある。ただしこれら諸特質の羅列は、儀礼の作業定義を明確化するどころか、その概念を拡散させ、捉えどころのないものとしていると言わざるをえない。

11　本書では儀礼研究者の Lukken に従い、機能に代わり次元（dimension）という語が多用される。その理由を機能主義という理論的前提に基づく批判を避けるため［p. 40］としているが、「さしあたってわれわれは機能と次元という語を互いに並列的に、抑制することなく用いたいと思う」［p. 40］と述べる通り、実質的には連帯－統合強化を想定した機能概念が用いられている。

12　それゆえ「集合的・公共的儀礼」に焦点をあてると述べながらも、個人的儀礼にも着目すると述べて論点を拡散させたり、ポストモダンという文脈やカルチュラル・スタディーに関連させる（そして本論ではほとんど言及されない）問いも見境なく提示される。

しかしながらこの狙いは結果として本書の学術的価値を見誤らせる主要な原因となってしまっているように思われる。なぜなら――これは探索的研究には許容すべきであろうが――これら拡散させたパースペクティブに見合った分析方法が一つとして提示されていないからである。この問題は、経験的例証が決定的に欠けた第二章および第五章の「診断[13]」にだけでなく、第三章の事例研究における印象論に傾いた記述にも認められる。それは皮肉にも、著者が批判対象とした、ジャーナリストや一部の研究者による災禍の儀礼の表面的で「直感的な把握」[p. 31] と何ら差異化することのできない次元に、本書を貶めている。「本書の構成を調査報告書として部分的には定義する」[p.18] のであればなおさら、経験的に基礎づけられないインプリケーションなど提示せず、事例研究にもとづく詳細な記述に徹するべきであったろう。以上を踏まえれば、今後の災禍の儀礼研究の方向性は自ずと明確である。それは焦点の定まった「パースペクティブ」および精緻な分析手続きである[14]。

ただしこれらの瑕疵にもかかわらず本書が、今後の災禍の儀礼研究において傑出した意義をもつと判断される理由は次の点にある。それは災禍の儀礼という経験的対象が規定されたうえで、災禍の儀礼を構成する諸要素、すなわち参加者の属性、儀礼の舞台の描写、諸々の儀礼行為およびスピーチの内容（そのほとんどが全文書き起こし）に至るまでが、極めて詳細に記述されているからである[15]。ある評者は、本書の内容を不必要に「詳細すぎる」と指摘するが

13　この語は本書では、一般的観察にもとづく傾向やトレンドの「主観的」言明といった意味合いで用いられている。

14　ただし後者の論点は、儀礼研究者に極めて困難な課題を突きつけることになる。それは儀礼の意味を誰がどのように語ることができるかという理論的問題に関連する。儀礼をいかに解釈するかという問題は、一方で儀礼の背後にある「世界観」や「機能―構造」を解明するという立場から接近されてきた。しかし1970年代より、超越的視点から外在的に解釈する調査者の特権性が厳しく批判されてきたのは周知の通りである。ただ他方で、インフォーマントが内在的視点から語る儀礼の説明をどのように評価できるのかという問題も残る。なぜなら儀礼の説明の語り手は、様々な状況や語る相手との関係性にもとづいて、過去の儀礼の経験を、現在の観点から再構成したり方向づけているからである。さらに、こと集合的に行われる災禍の儀礼にかんしていえば、大勢の参加者全員にその儀礼の経験を聞くことが事実上不可能であるという問題も付言することができる。

15　ただ惜しむらくはインタビューから得られたであろう遺族や生存者、災禍の儀礼の主催者の語りが、いつどこで誰によって語られ、またそれを誰がどのように記述したのかがほとん

［Brierley 2010：119］、それは本書の欠点などでは決してなく、むしろ災禍の儀礼研究を推し進めるにあたって欠くことのできない儀礼のリソースの開示として評価されるべきであろう。本書が国際的な比較研究への可能性をもつとすれば、それは第四章に付け足された国外の災禍にかんするエッセイによるものでは決してなく、むしろ儀礼研究最大のリソースを詳細に開示している点にこそある。以上を踏まえれば災禍の儀礼研究を展望するにあたって今後求められるのは、儀礼の詳細な行為形式、方向、人々の属性、語りなどを徹底的に比較しながら考察していくことではないだろうか。以上を評者に残された課題と可能性として受け止めたい。

**参考文献**


Brierley, Peter, 2010, "Book Review of *Disaster Ritual*," *Implicit Religion*, 13（1）, pp. 119-120.

Eyre, Anne, 1999, "In Remembrance: Post-disaster Rituals and Symbols," *The Australian Journal of Emergency Management*, 14（3）, pp. 23-29.

—— 2001. "Post-disaster rituals," J. L. Hockey, J. Katz and N. Small eds., *Grief, Mourning, and Death Ritual*: Open University Press, pp. 256-266.

——, 2007, "Remembering: Community Commemoration After Disaster," H. Rodríguez, E. L. Quarantelli and R. R. Dynes eds., *Handbook of Disaster Research*. New York: Springer, pp. 441-455.

福田雄、2011、「災禍と儀礼とリスク社会——『浮かばれない』死者たちの行方」『社会学批評』4、pp. 43-52。

福田雄、2014、『災禍の儀礼の社会学的考察——現代日本の慰霊祭・追悼式を事例として』（博士学位論文）、関西学院大学大学院社会学研究科。

Post, Paul, Albertina Nugteren and Hessel Zontag, 2002, *Ritualen na rampen: Verkenning van een opkomend repertoire*, Kampen.


---

ど明示されていない点にある。

Xu, Bin, 2013, "For Whom the Bell Tolls: State-society Relations and the Sichuan Earthquake Mourning in China," *Theory and Society*, 42（5）, pp. 509–542.